

マルコ12章「神を愛する人々」

1A 神を私物化する宗教者 1-12

1B 使者を迫害する農夫 1-9

2B 捨てた石を要とする神 10-12

2A 試され、試すイエス 13-38

1B カエサルより大事な神のもの 13-17

2B 生きている者の神 18-27

3B 最も大切な戒め 28-34

3A まことの教師 35-44

1B ダビデが主と呼ぶ子 35-37

2B 律法学者の見栄と貪り 38-40

3B 乏しい中から献げる寡 41-44

本文

マルコによる福音書 12 章を開いてください。イエス様は、エルサレムに入られて宮清めを行われました。それを前後にして、実の結ばれていないいちじくの木を呪われて、それが根こそぎ枯れていました。それはまさに、神に実を結んでいない、けれども葉っぱだけは生い茂っているイスラエルの姿を表していました。宗教はあるのですが、神との結びつきによってもたらされる良い実、正義とか憐れみがなかったのです。そしてイエス様が宮清めをしたので、翌日、宗教指導者らがやってきて、何の権威によってこれらのことをしているのか？と問い詰めました。イエス様は、誘導尋問的であり、イエス様を陥れるための質問であることを見抜き、バプテスマのヨハネはどこから来たのか？と逆質問されました。彼らは、そこで自分たちが真理を求めているのかどうかを試されたのです。彼らは、「分かりません」と言ってはぐらしたので、イエス様は、「では、わたしも答えまい」と答えられました。

1A 神を私物化する宗教者 1-12

そこでイエス様が、彼らに譬えを語られます。その実を結ばないイスラエルについて、その宗教指導者らが、神に対して実を結ばせないようにさせているという問題を明らかにされます。

1B 使者を迫害する農夫 1-9

1 それからイエスは、たとえで彼らに話し始められた。「ある人がぶどう園を造った。垣根を巡らし、踏み場を掘り、見張りやぐらを建て、それを農夫たちに貸して旅に出た。

イエス様がこの譬えを語られた時に、ユダヤ人たちはすぐに、イザヤ書 5 章のことを思い出したことでしょう。いちじくの木がイスラエルを表しているように、ぶどうの木もしばしばイスラエルを象

徴しています。神殿には、ぶどうの木も描かれています。そこを読みますね、「5:1-2 さあ、わたしは歌おう。わが愛する者のために。そのぶどう畑についての、わが愛の歌を。わが愛する者は、よく肥えた山腹にぶどう畑を持っていた。彼はそこを掘り起こして、石を除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、その中にぶどうの踏み場まで掘り、ぶどうがなるのを心待ちにしていた。ところが、酸いぶどうができてしまった。」主が、イスラエルを手塩をかけてぶどうを育てる農夫のように、イスラエルを養い、守り、育てたのですが、それはもちろん良い実が結ばれるためです。主がこれほどまでに関わってくださった民は、世に存在するでしょうか？いません、それは良い実が神に対して結ばれるためですが、その反対の実、食べることのできない酸いぶどうが実ってしまったのです。それで、主がぶどう園を荒らすことを語られて、事実イスラエルは、アッシリアとバビロンによって滅ぼされてしまいました。

私たちキリスト者も、弟子たちにイエス様が語られたように、ぶどうの枝であり、良い実を結ぶために生きています。エペソ 2 章において、基本教理として教えているのは、「エペ 2:8-9 この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。これはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることはないためです。」とありますが、しばしば見失っているのは、その後の文章です。「2:10 実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」良い行いを結ぶために、行いによらず神の恵みによって、信仰による救いをくださいました。ですから、私たちは霊的に成長する不断の努力が必要なのです。こここのイスラエルのように、神に対して実を結んでいることがないという危機はいくらでもあります。何度、聖書の教えを聞いても生活が変わらない。むしろ、「また聞いたよ、そんなこと知っている」として、怠惰な思いが出て来る。教会生活が惰性になっている。そんなことが起こったら、黄色信号です。

2 収穫の時になったので、ぶどう園の収穫の一部を受け取るため、農夫たちのところにしもべを遣わした。3 ところが、彼らはそのしもべを捕らえて打ちたたき、何も持たせなくて送り返した。4 そこで、主人は再び別のしもべを遣わしたが、農夫たちはその頭を殴り、辱めた。5 また別のしもべを遣わしたが、これを殺してしまった。さらに、多くのしもべを遣わしたが、打ちたたいたり、殺したりした。

主人の僕は、預言者たちのことであり、農夫は神の家を治めているイスラエルの指導者たちのことです。聖書の歴史を見れば、イスラエルが主に背いて危機的な状況に陥った時に、神が預言者を遣わされました。エリヤはその第一人者ですが、その後、預言者の数は増え、アッシリアによる捕囚、バビロンによる捕囚の前後は、とてつもない数の預言者が遣わされています。それによって、主に立ち返らなければいけないことを教えたのです。ところが、ここにあるように、彼らは悔い改めないどころか、彼らを迫害しました。迫害の度合いが激しくなり、打ち叩くだけでなく殺しもしました。

6 しかし、主人にはもう一人、愛する息子がいた。彼は『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に、息子を彼らのところに遣わした。7 すると、農夫たちは話し合った。『あれは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は自分たちのものになる。』8 そして、彼を捕らえて殺し、ぶどう園の外に投げ捨てた。

これは、イエス様ご自身です。父なる神は、これまでご自身のしもべを遣わしておられましたが、イエス様は預言者としての働きを行われていましたが、それ以上の方です。神の息子ご自身です。マルコの福音書が、「神の子、イエス・キリストの福音のはじめ。」とあったことを思い出してください。イスラム教では、イエスもモーセから綿々と続く預言者の一人として数え、神には息子はいないとコーランは主張しますが、いいえ、聖書は、預言者以上の存在としてイエスを証言しています。

農夫たちは息子を殺します。ぶどう園の外に投げ捨てた、と言われますが、事実、エルサレムの町の城外にあるゴルゴダの丘で十字架に付けられるように仕向けました。彼らの問題は何だったのでしょうか？貪りですね、彼が跡取りだと知って、それで相続財産は自分たちのものになるとしました。つまり、神の宮を私物として貪っていたのです。イエス様は、神の御子として、ご自分の父の家を清められたのですが、彼らはそれをよしとせず、自分たちのものだと思いました。新約聖書では、私たちが聖霊の宿る神の宮であるとされています。私たちの体で行うことに、それが神によって備えられたことを信ぜず、自分自身のものだとして神を退けるならば、宗教指導者と同じ過ちを繰り返していることになります。

9 ぶどう園の主人はどうするでしょうか。やって来て、農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるでしょう。

神は、実を結ぶ他の国民、すなわちご自身を救い主として信じるユダヤ人、また神の憐れみによって選ばれた異邦人に与えられます。聖霊の宿るイエスを信じる者たちの集まり、教会において実が結ばれ続けます。神は、このように実を結ぶ者を探しておられます。ご自分が呼ばれた者が応答しなければ他の者を呼ばれます。神はご自分の証言を決して絶やすことはなく、ご自分が神であることを明らかにするために人々を選ばれるのです。ですから、私たちはその神の恵みにあずかる者たちであり、神は必ず救いの御業を行われます。私たちが不従順であれば、主は他のところで救いの働きを行われますが、私たちがしっかりその働きに明け渡せば、主は必ずや実を結ばせてくださいます。

2B 捨てた石を要とする神 10-12

10 あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。11 これは主がなされたこと。私たちの目には不思議なことだ。』12 彼らは、このたとえ話が自分たちを指して語られたことに気づいたので、イエスを捕らえようと思っただが、群衆を恐れた。それでイエスを残して立ち去った。

この詩篇 118 篇 22 節の言葉は、新約聖書でしばしば引用されている箇所です。主が備えておられた逆説的な出来事、パロドックスが書かれています。家を建てる者たちが捨てた石が、要の石になったということです。要の石とは、石を積み上げることによって建てられる物が、その石が要となって建てられているので、それが無くなれば全体が崩れてしまうというところに置かれている石です。アーチであれば、その一番上にある石を外すと、全体が崩れます。建物であれば、隅の角にある石です。イエス様は、ユダヤ人の宗教指導者から捨てられてしまいましたが、しかし、その捨てられたということが、ユダヤ人と諸国の民を救うための要となった、つまり罪の赦しによる救いとなった、ということです。

神の働きは、このように私たちの人知を超えます。見捨てられたような出来事によって、むしろご自身の御業を前進させていきます。今、迫害のことを話しましたが、東アジアでは、朝鮮戦争でずたずたになって極貧であった韓国で、1970 年代からリバイバルが起こりました。文化大革命が起こってずたずたになった中国で、そのことがあってから一気にリバイバルが起こっています。そして私たちもそうではないでしょうか、人生の危機、他の多くの人々からは疎まれ、嫌がられるような出来事を通して、人生の要であるキリストを見出したのではないのでしょうか？

2A 試され、試すイエス 13-38

この警えを彼らは自分たちのことであることを知り、イエス様を殺そうと企みますが、群衆を敵に回してはいけないという政治的動機が働き、それで質問で試して、イエス様を陥れようと企みます。

1B カエサルより大事な神のもの 13-17

13 さて、彼らはイエスのことばじりをとらえようとして、パリサイ人とヘロデ党の者を数人、イエスのところに遣わした。14 その人たちはやって来てイエスに言った。「先生。私たちは、あなたが真実な方で、だれにも遠慮しない方だと知っております。人の顔色を見ず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。ところで、カエサルに税金を納めることは、律法にかなっているでしょうか、いないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めるべきでないでしょうか。」

パリサイ派とヘロデ党が共にやってきました。以前、イエス様がパリサイ派とヘロデのパン種に気を付けなさいと警告されたことを思い出してください。ユダヤ教の中で、パリサイ派はローマという異教の支配に対して、強く反発していました。熱心党のように武力を使ったり、反体制にはなりませんでした。ローマからの解放こそが神の国の始まりだと信じていました。そして納税は、ローマの権威に屈することであり、屈辱的だと考えていたのです。けれどもヘロデ党は、親ローマでした。なぜこの相反する考えを持つ二つの宗派また党派が一緒になってイエスに対立しているのでしょうか？それは、イエス様はそれぞれの教えに対して警戒をしておられたからです。一方は律法主義です、もう一方は世俗化、世との結びつきです。

彼らが共謀できたのは、どちらの意見においてもイエス様を陥れられたからでした。ローマはそ

の臣民に重税を課していました。収穫の十分の一を納めさせました。地所に生えている木々からの実を、五分の一を納めさせます。次に、所得税が一律 5% 課せられます。さらには生存権に対する税金で、年に一デナリ、一日の労賃に匹敵する金額を納めさせました。そしてユダヤ人は、神殿税を納めたりしていますから、本当にお金を取られていったのです。そこで、彼らは企みました。まず、「イエスは真っ直ぐに真理を語る方だ」ということです。先ほど話したように、宗教指導者は政治的に動いていて神の真理から目を背けていたのですが、今、このようにおだてることによって油断させようとしています。それから、カエサルに税金を納めるべきかどうか、それが律法にかなっているかどうか尋ねていますが、「かなっている」と答えれば、パリサイ人と同じように反ローマ感情を抱いている群衆は、一気にイエス様に興ざめします。そうすれば彼を捕えても群衆は反発しません。けれども、「かなっていない」と言われたら、ヘロデ党の者たちがローマ当局を呼び出して、彼らに捕まえてもらうだけです。どちらに転がっても、イエス様を落とすことができます。

15 イエスは彼らの欺瞞を見抜いて言われた。「なぜわたしを試すのですか。デナリ銀貨を持って来て見せなさい。」16 彼らが持って来ると、イエスは言われた。「これは、だれの肖像と銘ですか。」彼らは、「カエサルのです」と言った。17 するとイエスは言われた。「カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」彼らはイエスのことばに驚嘆した。

デナリ銀貨をイエス様は持ってこさせますが、そこにはカエサルの肖像の銘があります。そこで、イエス様は「カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」と言われます、これには聞いている彼らが驚嘆しました。これはどういうことなのか？

イエス様は、まずパリサイ派の小さい心を指摘しておられます。パリサイ派は、カエサルへの納税に対して、それが偶像礼拝であるとか、人が王となっているであるとか、そんなことで対抗意識を燃やしていましたが、彼らもまた、カエサルの銘の入った銀貨をいつも使って生活しているのです。これほどの矛盾はありません。世俗の国家の恩恵を受けながら、それが世俗であるとか、異教であるとかいうことで反発している、おかしくないですか？ということ。聖書によれば、ロマ 13 章ですが、すべての上からの権威は神からのものであり、権威に従いなさいと命じています。さらに、納税もしっかり行いなさいと言っています。これらのことは、世のことなのです。そして神が、世に立てられた権威をご自身が立てたものとして認めておられるのです。ですから、世にあるものは世にあるものとして、主にあつてその制度に従うのです。そのようなことは、ただしっかりとやっつけて、そうしたことと神のこと、神の国のことを一緒くたにしてはいけない、とイエス様は言われています。

そして、「神のものは神に返しなさい」と言われるのです。カエサルの銘が銀貨には彫られていますが、私たちには神の形が自分たちに彫られています。この方に自分を徹底的に捧げなさいと命じておられるのです。この世のことできちんとしなければいけないとするのがヘロデ党ですが、その世を支配しておられるのは神なのです。世に媚びる必要は全くないのです。ですから、カエサ

ルに従うのか、反発するのかといったところに神の大義はなく、カエサルを超えたところに神の国があり、あなたがたはその働きに従事しているのだよということです。

2B 生きている者の神 18-27

そして次に、ユダヤ教の中で別の宗派がやってきます。サドカイ人です。

18 また、復活はないと言っているサドカイ人たちが、イエスのところに来て質問した。19 「先生、モーセは私たちのためにこう書いています。『もし、ある人の兄が死んで妻を後に残し、子を残さなかった場合、その弟が兄嫁を妻にして、兄のために子孫を起ささなければならない。』」20 さて、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、死んで子孫を残しませんでした。21 次男が兄嫁を妻にしましたが、やはり死んで子孫を残しませんでした。三男も同様でした。22 こうして、七人とも子孫を残しませんでした。最後に、その妻も死にました。23 復活の際、彼らがよみがえるとき、彼女は彼らのうちのだれの妻になるのでしょうか。七人とも彼女を妻にしたのですが。」

私たちは先週の日曜日、ここの箇所をじっくりと学びました。サドカイ派は、祭司たちの一派であり、エリート貴族のような人たちです。ローマとのやりとりで神殿礼拝を運営するので、現実的な方法を取っていました。ローマを恐れてイエスを殺すことをサドカイ派のカヤパは政治判断しましたが、皮肉にも紀元 70 年にローマにエルサレムが破壊された後は、彼らもいなくなりました。

彼らは書かれた律法、モーセ五書のみが神からのものと信じ、復活も、御使いも信じていませんでした。それで、律法にある、「兄が死んだら、弟が兄嫁と結婚しなければいけない」というのを使って、仮定の話をしました。彼らは目に見えるもの、物質しか信じていなかったのも、復活というものがいかにへんてこなものなのかを示そうとしていたのです。

24 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、聖書も神の力も知らないのも、そのために思い違いをしているのではありませんか。25 死人の中からよみがえるときには、人はめとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのようです。

サドカイ派のような合理主義者に対して、イエス様は「聖書も神の力も知らない」と言われます。多くの聖書批評家が、批判しますが、彼らの多くが聖書そのものを読んでいません。何か他の人たちの本は熱心なのですが、聖書そのものには無知なのです。そして、神の力を信じません。そもそも天地創造をされた神ですから、そこには無限の力があります。そうしたことを知らないのも、思い違いをしているのです。そして、結婚というのは永遠ではなく一時的なものであり、この地上でキリストと教会を表すために立てられています。復活をしたら御使いのようになります。

26 死人がよみがえることについては、モーセの書にある柴の箇所で、神がモーセにどう語られたか、あなたがたは読んだことがないのですか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの

神である』とあります。27 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です。あなたがたは大変な思い違いをしています。」

イエス様は復活を、彼らの信じているモーセ五書から立証されました。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神というのは、単なる昔の人たちの呼び名ではなく、彼らが生きているからこそ沿うご自身を呼ばれているのです。死んだら終わりではなく、生きているのだ、そして生きている者たちの神なのだということです。ですので、私たちは生きている人々のことを気にします。その人の魂が生きているうちに救われることを願っています。そして死んだ人については、イエス様を信じた人であれば甦るということを思います。

3B 最も大切な戒め 28-34

28 律法学者の一人が来て、彼らが議論するのを聞いていたが、イエスが見事に答えられたのを見て、イエスに尋ねた。「すべての中で、どれが第一の戒めですか。」

ここで流れが変わっています。指導者らがイエスを試すために質問していましたが、ここでは誠実に質問しています。求道の思いで律法学者が質問しています。なぜなら、そのサドカイ派に対するイエス様の言葉は、まさに復活を信じているパリサイ派の信じていることであり、その回答に感心したからです。マタイ伝では、彼は律法学者ですが、パリサイ派の人であることが分かります。

29 イエスは答えられた。「第一の戒めはこれです。『聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。30 あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』31 第二の戒めはこれです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。』これらよりも重要な命令は、ほかにありません。」

午前礼拝でお話した通りです。要は神を愛すること、そしてその愛をもって隣人に接することです。愛という結びつきによって、神とつながり、また人々につながります。いろいろな人がいろいろな議論をしていますし、何が大切でそうでないかを議論していますが、最も大切なものは一つだけだということがここで分かりますね。

32 律法学者はイエスに言った。「先生、そのとおりです。主は唯一であって、そのほかに主はいない、とあなたが言われたことは、まさにそのとおりです。33 そして、心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛すること、また、隣人を自分自身のように愛することは、どんな全焼のささげ物やいけにえよりもはるかにすぐれています。」34 イエスは、彼が賢く答えたのを見て言われた。「あなたは神の国から遠くない。」それから後は、だれもイエスにあえて尋ねる者はいなかった。

律法学者は、そのままイエス様の言われたことに同意しました。それでイエス様はそれを賢く答えたのを見た、とあります。そうですね、主の教えをその通りだとして自分のものとして受け入れる

ということは、知恵あることです。また、彼は理解して受け入れています。全焼の献げ物やいけにえよりも優れているというのは、預言者たちも語っていたことであり、そしてこの神殿において彼がそう発言しているのですから、勇気が要ることだったでしょう。それで賢いとされたのです。

けれども、「神の国から遠くない」と言われています。神の国には入っていません。なぜなら、イエスは教師、ラビであったかもしれないけれども、自分の主、キリストとして受け入れているわけではなかったからです。理解をしていることと、自分がその前にひれ伏して、自分の魂を明け渡すことは大きな違いがあります。この律法学者のように、近づいている人たちは大勢います。そこから、御国に入るためのこと、つまり主を人格的に受け入れ、信頼するところまでいかないといけません。

3A まことの教師 35-44

そこでイエス様は、自分たちの聖書解釈に留まっている律法学者らに、根本的な問いかけをされます。果たして、あなたがたが信じているキリストとは、本当にあなたがたが信じているとおりののか？ということなのです。

1B ダビデが主と呼ぶ子 35-37

35 イエスは宮で教えていたとき、こう言われた。「どうして律法学者たちは、キリストをダビデの子だと言うのですか。36 ダビデ自身が、聖霊によって、こう言っています。『主は、私の主に言われた。「あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。』』37 ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるのに、どうしてキリストがダビデの子なのでしょう。」大勢の群衆が、イエスの言われることを喜んで聞いていた。

律法学者たち、またユダヤ教の人たちは、来るべきメシア、キリストはダビデの子であることを信じていました。それは、ダビデに対する神の約束があり、世継ぎの子が永遠の御国を受け継ぐことを神は彼に約束しておられたからです(Ⅱサム 7:12-13)。その他の箇所でも、ダビデの子がメシアであることが強調されています。けれども、彼らのメシア像はそれ以上ではありませんでした。つまり、ダビデの子孫として、人として生まれて来るということであり、神とは同列ではないのです。今でもユダヤ教の人たちが抵抗を覚えるのは、私たちが人であるイエスを、まるで神であるかのように持ちあげているためです。それで、偶像礼拝のように見えるのです。

しかし、聖書をよく見れば、メシアはダビデの子であると同時に、神の子であられることです。イザヤ書には、「ひとりのみどりごが私たちたちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。」とあります。ここの嬰兒は、人間の子であります。次の男の子というのは、息子ということです。そしてその名がまさに神ご自身として呼ばれるのです。ダビデの子であり、かつ神の御子であることを指している預言です。

イエス様がここで言及されている預言は、詩篇 110 篇 1 節です。ここも典型的なメシア詩篇で

す。ダビデが、聖霊によって言っているとイエス様が強調していることは興味深いです。人が勝手に語っている言葉ではなく、神ご自身の霊によって、つまり靈感によって書かれていることの証拠です。ダビデが、「主は、私の主に言われた。」と言われていて、初めの「主」は神ご自身ですが、「私の主」と言っているのはキリストです。その後で、キリストが敵を自分の足台にして世を支配されることを預言しているのですが、なぜ、ダビデの子であり、かつ彼の主なのか？と問うているのです。単にダビデの子孫であるならば、解明できないことが二つあります。一つはその族長文化の中で、父が子を主と呼ぶことはまずしないことです。今の社会でもそうですね、父が子に主と言わせたらとんでもないことです。そして、もう一つはダビデの子孫であるのに、ダビデが生きている時にすでに存在していたということです。

つまり、イエス様は先にぶどう園の譬えで、息子であれば敬ってくれるだろうという主人の言葉のとおり、キリストは神の御子でなければいけないことを語られています。それを律法の専門家である者たちが、聖書から単なる人であるという理解に、イエス様が挑戦を与えておられるのです。彼らが答えられないのですが、群衆が喜んで聞いています。真実な教師、卓越した神の教師がここにおられるのです。

2B 律法学者の見栄と貪り 38-40

そしてその卓越した教師が、律法学者について強く戒められます。神の身分であられる方が、主であられる方が、しもべの姿を取って仕えておられます。しかし、律法学者は違います。

38 イエスはその教えの中でこう言われた。「律法学者たちに気をつけなさい。彼らが願うのは、長い衣を着て歩き回ること、広場であいさつされること、39 会堂で上席に、宴会で上座に座ることです。40 また、やもめたちの家を食い尽くし、見栄を張って長く祈ります。こういう人たちは、より厳しい罰を受けます。」

神のおられるところに、自分たちがいたいと願っているのです。人々からの称賛を気にして、いかにも霊的に見せるために長い衣を着ていること。そして広場で挨拶されることです。そして人々の称賛を集めるだけでなく、寡の家を食い尽くしています。これで考えられるのは二つのことですが、寡の家からも宮への納入金を半強制的に徴収していたのか、あるいは、寡に対する神の特別な配慮が律法で定められているのに、彼らは彼女たちの存在を度外視していたということです。そして祈りまでが、見栄をはる長い祈りになっているとのこと。

神に用いられる者たちが、いつも気を付けなければいけないことです。神に用いられていることで、称賛を受けたり、挨拶されたりします。また寡のような貧しい人、弱い人を度外視する危険もあります。イエス様はしもべに徹しました。この方を主としているのですから、私たちもしもべでなければいけないのです。

3B 乏しい中から献げる寡 41-44

そして最後の話は、12章における話のしめくりになるような内容です。実を結ばせる使命と、それにむしろ反対するようなことを行っている宗教指導者の対比があります。そしてカイサルへの納税よりも、神のものである自分自身を神に捧げることに集中しなさい、ということ。何が第一の戒めか？という問いに、神を心を尽くして愛しなさいということ。そういったことが、すべて一人の女の中に模範として見えます。そう、今、イエス様が言及された寡です。

41 それから、イエスは献金箱の向かい側に座り、群衆がお金を献金箱へ投げ入れる様子を見ておられた。多くの金持ちがたくさん投げ入れていた。42 そこに一人の貧しいやもめが来て、レプタ銅貨二枚を投げ入れた。それは一コドラントに当たる。

レプタは、最も小さな貨幣の単位で、一デナリの128分の一の価値です。二レプタで、一デナリの64分の一の価値です。一デナリが一万円だとすると、150円程度の金額です。そして次に、イエス様の驚くべき視点があります。

43 イエスは弟子たちを呼んで言われた。「まことに、あなたがたに言います。この貧しいやもめは、献金箱に投げ入れている人々の中で、だれよりも多くを投げ入れました。44 皆はあり余る中から投げ入れたのに、この人は乏しい中から、持っているすべてを、生きる手立てのすべてを投げ入れたのですから。」

これは、比喩的に話しているのではありません。霊的な実体として、その通りなのです。彼女は、他の人々よりも誰よりも多くを投げ入れたのです。寡は、福祉制度の整っている状態とは異なり、半分、乞食に近い状態です。律法の中で守るように命じられています。ですから、150円程度のお金は彼女によって大金だったのです。そして、そうした金も律法学者たちは食い尽くしていたのかもしれない。そのように宗教者らからさえ虐げられていた女は、被害者意識や怨念を持つことなく、真っ直ぐに神を心から愛し、それで自分にあるものを全て捧げました。

私たちが今、使っている言葉に「フェイク・ニュース」がありますね。その反対がリアルです。フェイクなのか、リアルなのか？私たちのクリスチャン生活が、表向きのためだけにやっているのでは、律法学者のようなフェイクです。しかし、心から主に捧げる時に、それは周りから疎外されるような感じになったとしても、要石であられるイエス様と同じように、神の国では偉大なこととしてみなされます。